

## 藤樹精神と学校教育

小久保 義直



私が現在勤務する高島市立青柳小学校は、滋賀県西部の高島市の回りを田畑に囲まれた田園地帯にある。校門を一步出ると、中国式庭園「陽明園」、「近江聖人 中江藤樹記念館」、「藤樹神社」が視野に広がる。また、徒歩で五分程南に行くと中江藤樹のお墓がある「玉林寺」、多くの門弟が学んだ「藤樹書院」が建っている。これらの施設で明らかかなように、青柳小学校区は、郷土の偉人として有名な「中江藤樹」のゆかりの土地である。

近江聖人「中江藤樹」は、郷土の生んだ偉大な人物である。内村鑑三の「代表的日本人」にも挙げられているように、「村落の教師」として多くの人々に学問を教え、大きな感化を与えてきた。日本が世界にも誇りうる大鉄人であるといえる。

このゆかりの土地で、教育に携わる者は、先哲の残された学徳を教育の中に生かし、日常生活において、その精神を具現化し、地域社会に広く中江藤樹の遺徳の顕彰を図ることが、大きな教育課題となっている。

## 藤樹精神を生かした青柳小学校の教育理念と教育目標

青柳小学校における藤樹精神を生かした教育は、明治七年の開校以来、教育の全精神を貫く基盤として、地域の伝統として推進されてきた。しかし、時代的理解・社会への迎合が先行し、忠孝一体の皇国史観の立場から提唱された教育の場においては、中江藤樹の学徳を歪曲視したり、または、偶像化・神格化したりされたこともあった。

そこで中江藤樹の全人格・全生涯・学徳・教えなどの理解を通して、正しい認識のもとに、普遍的な内容や現代的意義を見出して、教育の場に有効に取上げることが重要である。

中江藤樹の学徳は、高邁深遠であり、人間として世に生きる道、人格の形成、真理の追求、学問の在り方などについて、詳細綿密に構築された哲学的体系である。また、その生涯を見ても、立志・勉学・主体的な実践力・高德感化など、現代の我々が学ぶべきところは多い。

### 副読本発行の経緯と活用研究

中江藤樹の思想・学問は、私たちには容易にその真髄に迫り得ない哲理である。しかし、四〇〇年を経た現代社会にも、そのまま適応し得るその意義と価値については、普遍的なものが多く、すでに識者によって認められているところである。

青柳小学校の中江藤樹研究は、多くの先輩の方々の努力によって、教育実践に生かす研究として絶えず継続されてきた。中江藤樹に関する読み物資料としては、古くは大正時代に既に発行されてきたが、仮名遣いや文章表

現が昔風で、読みづらいものであった。

昭和四三年度末に、「中江藤樹道徳資料集（教師用）」が刊行され、藤樹資料の道徳の分野における、計画的な道徳指導体系として打ち出され、教育現場における実践のよりどころとして、一つの新しい方向が与えられた。

この継続的發展研究の取組として、中江藤樹を全体的に取上げて、その人間像をクローズアップさせ、あわせて、当時の歴史的・社会的背景とのかかわり合いの中で捉えていき、また、子どもの学習の中に計画的に取り入れ、その精神を定着させるための副読本ができた。昭和四六年三月に初版が出て以来今日に至るまで、何回となく改訂版が発行されている。

この副読本は、中江藤樹の伝記を中心として記述されており、どの領域、どの教科で活用するかは、固定的に考えられていない。一・二年生は教師の読み聞かせを活用し、三年生から一人ずつ配布され、六年生の卒業時まで、一応全般を取り扱うようにしている。

### 副読本活用における配慮点

(一) 道徳の時間の資料として

中江藤樹の伝記を中心としたこの副読本を取り扱った場合、配慮すべき点がいろいろ考えられる。

一、道徳資料として、効果的に活用できるかどうか

その資料に子どもが興味をもち、意欲的に取組むかどうか、子ども達に記述の内容が理解できるかどうかにかかっている。そのために、どの資料をいつ、どのように取上げるか、資料構成は適切かどうか、中心価値をどう考えるかなど、子どもの反応を予測しながら、指導案を考えることが大切である。

## 二、中江藤樹は、近づき難い人か

中江藤樹を完成された人格者として、ある時点でのエピソードのみを中心に考えると、普通の人間とは違った特別な能力を有した人ようになってしまふ。尊敬はするが、自分には及びもつかないものであるという考えに立ってしまふと、道徳的な実践意欲の定着が難しい。あくまで、ある段階においては、自分たちと同じ人間である。悩みもあり、苦しみもあり、失敗や誤りもあるという時点から出発し、なぜその人が偉大な人物になったかを考えさせたり、生き方から学び取ったりする過程を重視することによって、身近な存在になり、自らの生き方としてのめあてにしたり、意欲づけにつながることもできると考えられる。

## 三、人物の優れた人間性を大切に

概して、偉人というと、社会的に大きな事業をしたり、後世に残る発見・発明をしたりとか、政治的手腕において、いかに力を發揮して社会的に貢献したかで評価されることが多い。しかし、このような華やかな生涯なくとも文化面ですばらしい業績を残したり、優れた徳行で周囲の人々に大きな感化を及ぼしたりした人もいる。隠れた面で目立たない働きをした縁の下の力持ち的存在であっても、その生き方や働きが尊い場合、積極的に取上げたい。中江藤樹は、生前においてすでに地理的な近遠にかかわらず、その優れた学徳が多くの人に尊敬されていたが、すべて、日々の真摯な努力と実践により培われたものである。この点を大切に扱いたい。

## 四、偉人から何を学ぶか

偉人からの学び取り方については、いろいろな方法や観点がある。中江藤樹に関して学ぶ立場として、森信三氏（元神戸大学教授）は、次のように述べている。

- ① 純粹に考証的な立場であつて、その人物の言行、著作、思想を文献にしたがつて、史実を克明に研究し、

その中から学びとろうとする方法。

② 単に文献中心の研究には満足しないで、その時代における、その人物の占める位置、人間としての生き方に迫ろうとするもの。

③ 深くその人物の精神を学び、自己の現実の生活に生かそうとする実践的な立場。

④ もし、その人物が現代に生きていたら、いかなる思想をもち、いかに生き抜くであろうかという立場。

以上であるが、学校教育においては、どのように考えればよいのか。一般的に①や②の立場に立つ人達によって、得られた成果を手掛かりとして、それを今日的な視野から、意義を見出し、教育の原理や教育実践の方法に生かしていくのが適切であろう。

伝記の教育的効果は、子どもが伝記の主人公に共感し、その人生経験を理解し、その精神的価値を確実に確かむことが大切である。このことで、生活態度にある種の変革をもたらし、主体的に人生を創造しようという意識をもつことになる。道徳の時間における伝記物の読み物資料は、子どもによって、人間としても正しい生き方をいろいろな方法や場面を通して真に納得させて、少しでもこれに迫り、実践への意欲を盛り上げさせるための一つの素材である。このことが、伝記人物を人間形成にいかす意義であると思われる。

#### 五、時間的な隔たりの克服

歴史的な人物においては、長い時間的な隔たりがあり、政治的・社会的な違いから来る価値観や、宗教観もあり、そのまま資料として使えないことがある。適用しない部分を削除したり、表現方法を変えたりして、現代への適用を図ることが望ましい。高学年ともなれば、その人物が生きていた時代背景の中において、当時の社会に

いかに働きかけ、生きてきたかという時代的感覚の上で捉えさせ、適用を図ることができる場合がある。

自由思想の持ち主であった中江藤樹が「形にとらわれず、時と処と位とに相応して、適當恰好を得よ」と、「中の思想」について述べているように、時代は違っても、その時、その場によって、最もふさわしい行いをとることの必要性を考えさせていくようにしたい。

#### 六、道徳的価値観の違い

封建社会における道徳と民主主義の時代の道徳には、事柄によっては著しい差異が認められるのは当然である。しかし、この違いは、形式的な面や当時の為政者によって意図的に作られた道徳観に起因する場合が多い。人間本来のあるべき姿、願い、人としての歩むべき道は古今東西を通じて普遍である。したがって、普遍的な価値そのものを見出しながら、古人の教えに固守することなく、指導のあり方を考えることが必要である。

#### 七、授業展開において

中江藤樹を取り扱う場合、思想的な解釈と素材の持つ本来の難しさがある。また、現実の生活から遊離して考えられがちである。したがって、学習展開にあたって、美談づくめの奇麗事に終わったり、子どもへの価値の押し付けになったりしないよう配慮が必要である。自己の問題として受け止め、内省し、意欲付けをするゆとりのある指導が大切である。

#### (二) 国語科の題材として

中江藤樹の口碑伝説には、「赤ぎれこうやくの話」「馬通しのおいはぎ」「看板の下書き」「小さい親切」「臨終の親孝行」など、たくさん語り継がれている。これらの話の多くは、門弟や近くに住む村人の口から語られたと考えられる。年月を経るうちに尾ひれがついたり、誇張されたりしたのかもしれないが、中江藤樹の人柄を知る

上で貴重な資料である。

副読本「藤樹先生」には、「あかぎれこうやくの話」「おいはぎと先生」「そばやのかんばん」「車が田におちた」「先生の臨終」として、取り上げている。

道徳の時間の中心資料として活用することが多いが、物語として読んでも興味深いし、国語科の読み物題材としても優れた内容である。国語の時間に読み聞かせをした後に話し合いをしたり、集団読書をしたり、読書感想文の題材とすることも多い。

中江藤樹に関するこれらの読み物を通して、温かい人間性に触れさせたり、深い感動を得させたりしたい。子どもの発達段階に応じて、事前に時代背景について学ぶこと、挿絵を用意すること、発展学習として劇化などの表現活動に生かすことなども、学習を深める上で効果的である。

## 中江藤樹の学徳

### (一) 藤樹学

江戸時代初期に生きた中江藤樹は、陽明学者と目される場合もあるが、厳密には断ずることはできない。博学の士となることを求めず、自己の内面的要求に応えるものとして、儒学を学んだ藤樹は、致仕して故郷に帰り自由な立場で道を求めた。当時の思潮からいえば、封建体制確立の過程における抵抗の精神の表れであると考えられる。

中江藤樹は、自己の問題として突き詰めていくうちに、朱子学を脱却して陽明学への方向をとり、陽明学との出会いがあったと思われる。したがって藤樹の「考」を中心とする考えは、天地の主宰者に対する「考」を根幹

としたものにもまで深められ、独自の藤樹学を確立した。人は本来平等であることを主張し、社会秩序の必要性を認めつつも、それは本性において平等な人間の、人間としての価値と能力の差に基づいて構成されなければならないとしている。この考え方は、人間は先天的に不平等であり、支配者と被支配者のいずれかに運命付けられている徳川社会とは、相対立する考え方であった。

また、中江藤樹の「良知」についての考え方も、陽明の事上練磨に見られる、動的、行為的性格に対して、静的、観照的性格のものであった。このようにして、その関心は、もっぱら内面に向けられ、自由な精神の確立が求められた。もちろん陽明学的発想は、当時の幕藩体制に相容れざるところがあり、官学としての林家の朱子学や幕府からは、反体制的な異学として歓迎されていなかった。

## (二) 中江藤樹の人間像

藤樹学の特徴は「良知の学」といわれている。「愚痴不肖といえども良知良能あり。その良知良能を失わざれば愚痴不肖の善人の徒なり。」とか、「人の本心は善にして悪なし。親を愛し兄を敬し善を好み、悪をにくみ、是を知り非を知る。是則固有の良知にして人々然り。」とあるように、良知は人の本心であり、万人固有であるとしている。このような徹底した人間尊重と個性の確立を図った。また、身を修める根本は「良知に致る」ことで、「明德を明にする本は、良知を鏡として独を慎むにあり。」ともいっている。

また、中江藤樹は、学問をするにあたり、訓話、記誦、口耳の学を排斥し、至徳の本体を立てるを要としている。それは単なる知識の学問ではなく、日々実践の学であることを説いている。即ち、これは本心本体を覚る心学であり、身の行いをよくする身学であるといえる。知行合一の思想も、このことに表れている。

中江藤樹の「孝」の思想で、最も異色なものは、「全孝」「大孝」の思想である。孝を人倫の根本とし、しかも、

この孝は単に親に対する服従と奉仕のみを意味するのではなく、天地に通ずる人の道全体をもって孝としている。これは孝経を愛読し、その触発によって、愛敬を中核とする孝の実践へと発展したわけである。「元來孝は太虚をもって全体とし、万劫をへてもおわりなく始めなし。孝のなくときなく、孝のなくものなし。かくのごとく広大無辺なる至徳なれば、万事万物のうちに孝の道理そなわざるはなし。」「夫れ孝徳は方寸のうちにそなわりて太虚に充塞し、六号包羅し、上は無始の往古に達し、下は無窮の未来に徹し……。」と述べているように、人の道としての孝の必要性を説いている。

藤樹学の特色の一つに「権の思想」がある。この権とは、時と処と位に依じて、最もふさわしい道德的判断を行ふ徳の主體的な働きをいう。こうした活発な心の働きについて、中江藤樹は、万人にこれをめあてとして工夫することを求めている。「時と処と位とによくかないて、相応したる義理を中庸と名づけたり。」とか、「儒書にのする所の礼儀作法は、時により所により人によりて、そのままおこなわれぬものにて候。……たとい、儒書にのする所の礼法を、すこしもちがわず皆とりおこなうといふとも、其おこなう所、時と処と位とに相応適當恰好の道理なくば、儒道をおこなうにはあらず、異端なり。」といっている。また、「権は秤のおもりなり。聖人は、おこないたもう所ごとく天道の神理に適當恰好なる景象、秤のおもりの定まる所なく、往來滯ずして物の輕重をはかりて適當恰好なるに似たる意あるによつて象をとれり。」のことばからも、その教えがうかがえる。

### (三) 中江藤樹の教育精神

「根本真実の教化は、徳教なり。」「教は、身教を以ていう。必ず慎独の上にあつて講ずべし。」の言葉から分かるように、知識のみの教化や、口先だけの教育ではなく、愛敬の心をもつた徳教、身教を重視している。また、人間愛のない教えは眞の教育ではない。一視同仁的愛の教えの大切なことを述べている。

また、個性に応じて自発的に啓発させることが大切で、それには教える態度ではなくて、同志同行の心持でいくべきであるとしている。調和と統一のある全人教育を中核とした真摯な求道の生涯、門弟や近隣の者への感化は教育者である私たちが今もお師道として仰がなければならぬ。

#### (四) 現代的な意義

林家の学問が、幕府の御用学として重視されていた時代に、人間平等・人間尊重の立場に立って良知を取り上げた藤儒学は、全く異色のものであった。形式を尊び、身分制度補強するための朱子学にあきたらず、自己の心を大切にし、すべての者の良知を信じ、周囲の多くの者に感化を与えた中江藤樹の徳は、偉大なものがあり、現代の社会においても大きな価値をもつといえる。独学・困学の上、ついに聖境に達した精進勉励と知行合一の実践道徳による生活態度は尊いものがある。また、内に求めること敵にして、たえず自反慎独により人格の完成をめざした信念と謙虚さは、現代の教育にも不可欠である。

視点を變えて、中江藤樹の生涯を見たとき、毅然として主体的な生き方をしたことを挙げなければならない。一生の生活が保障されている武士社会を捨てて帰郷し、部落の教師として貧しい生活をするに至る。その転換期においては、相当な決断力を要したであろう。たとえ、親に孝養を尽くすという真情があったにせよ、命を賭けて脱藩を執行したことについては、当時の社会機構からみても、よほど強い決意がなければできないことである。概して、人間は安易な道を選び易く、権威に対しては盲従し、自己の信念を曲げてでも栄達を求めることが通弊であるが、この点から考え合わせても感服せざるを得ない。

#### 「中江藤樹の教え」と地域の子ども達への指導

(一) 子ども達が、自分の地域の歴史や文化を学ぶことの意義

教育は本来、個別的なものであり、個々の家庭が担う機能であり課題である。

公教育↓社会的、歴史的、文化的、政治的、経済的な制度の中の機能としての教育

教育は、個人の自立をめざすものであるけれども、孤立して生きられないから、自分やその周辺にかかわる歴史や文化（家庭や郷土）を核として、外界についての知識と理解を（社会化、国際化）広げていく。人間が自己を確立するためには、地域性（郷土）が不可欠である。

昨今の市町村合併によって組織が大きくなると、全体としての統一とか共通化の教育という点が出てくる。それが強調されると、それぞれの市、町、村、字の歴史や人物、伝統文化が弱体化し、希薄化することになる。むしろ地域性を、そのまま存続させていく教育を市あるいは町の教育とする必要がある。学校では、地元の歴史や人物、産業をよく知ってそれを子どもに学ばせることが大切である。各学年ごとの文化財等のカリキュラムが作成されなければならない。

現代の学校の教師は、組織の機能を分担する一員であるから、自らの生まれ育った場所とは関係なく、職業としての教師、教育公務員としての責任や使命が求められる。しかし、教育に携わる者は、職業としての教師とひとりの人間としての私生活、子どもの成長期に直接、間接にかかわりを持つ人間としての存在とが統合された存在である。

人は学ぼうとする対象であるその人物に、学ぶ値打ち、価値があることを納得できないと本当には学べない。

(二) 中江藤樹とはどのような人物なのか

前述したことであるが、歴史上の人物の評価というのは、いつの時代にも、その時代の価値観が大きな影響を

与える。中江藤樹の思想や生涯に関しても様々な考え方がある。その人の優れた点を過大評価したり、欠点を批判的にあげて全体像にしたりされがちである。また時代の価値観が、その時代の子ども達はもちろん、社会の多くの人々に良い影響をもたらすこともあれば、取り返しのできない過ちを犯すこともある。人間は、長短善悪複雑な要素をもっているにもかかわらず、その人物の生き方や考えに共鳴した人は、その人物を全体として肯定し、実物を誇張して表現することが多いからである。そうかと言って江戸時代の人々の視点をもって中江藤樹を見るというのものなかなか困難なことである。やはり、私たちは今の私たちが抱える人生の課題解決に照らし合わせて、中江藤樹を見るほかない。それは、極めて部分的で自分勝手な解釈になってしまうであろうが、いつも私たちは、その時代に生きる人間の制約を免れることはできない。

だから、人の生き方については、子ども達に誠実に資料を提供した上で、それに対してとらわれないで率直に好悪を表明させ、自分で選んでもらうようにすることが大事である。

中江藤樹の人物像は以下のようにまとめられる。

- ① 儒教（朱子学、陽明学）を学んで自ら実践し、弟子に教えた。・・儒者
- ② 孔子の思想、「徳」、「孝」、王陽明の「良知」を実践しようとした。・・思想家
- ③ 病気の母への孝行のため職を辞し、故郷へ帰省した。・・武士
- ④ 周囲の人々の徳化、教育に積極的だった。・・教育者
- ⑤ 学び（知）と実践（行）を一致（合一）させようとした。（不言実行）・・陽明学者
- ⑥ 高位、名声、富裕を求めず、謙虚、清貧そのものだった。

(三) 「中江藤樹の教え」を子ども達にどう指導するか

① 人は誰でも「良心」があることに気づいて、まっすぐに生きる決心をすること。

② 人は、いつもそういう正しい行いが出来なくて、失敗をすることがあるけれども、練習する（学ぶ）ことによってだんだんできるようになることに自信をもつこと。

③ 家族（父母、祖父母、兄弟姉妹）や友だちなど周りの人を大切にして、故人に感謝すること。

④ 自分の命は動植物を食べた結果だから、感謝して自分の命を大切に長生きすること。

（四）教育に携わる者にとっての中江藤樹

人を教えることで収入を得ようとせず、村人や弟子を育てようとした意図は何なのか。儒学では、正心、修身、齐家、治国、平天下とあって、弘道（道を弘める）が大事とされている。学問とは、生計、技能のためにするものでなく、修身のためのものであると考えていた。この特性に対する覚醒は、極めて重要なことで、中江藤樹が一一歳のとき、「自天子以至庶人壹是皆以脩身為本」（大学）に出会った。

それ学問は、心のけがれをきよめ、身の行いをよくするを本実とす。学は良知に致るより外はなく候。その良知に従いがたきは私欲にくらまざる故にて候。

今日、知識、機能の習得などは、自分の興味、趣味、金銭獲得の手段となっている。それに比べ中江藤樹は、人の成長や幸福、家族の救済、社会の改善、国家、世界の平和に目標をおいた人生で、指導者側の、精神的な向学心、向上意欲、成長とが、被教育者である弟子たちの成長に影響を与えるということに確信をもっていた。

現代では、公務員倫理、企業のコンプライアンスが叫ばれるが、法令があるから守るというのではなく、それを守る誇りを持ち、それを生きがいとするというのが、中江藤樹の求めていた人間の生き方といえる。

さらにいえば、自分を生み育ててくれた良心や祖父母を尊敬し、大事にすること。私たちの存在の源である祖

先に感謝し篤く祭ること、自分の体は動植物から成り立ち、究極は宇宙の資源からできているから、資源を節約し浪費しない。徳を大切にする生き方を実践し、子孫をそのように立派に育てること。家族の絆を大切にし、自分が宇宙の歴史につながっていて、自分や他人の命のかけがえのなさ、また死を逃れられない人間が、世代の持続を通して永遠性を得る、つまり継続に重きをおいた考え方、宇宙や社会とのつながりを自覚して生きる人間の育成をめざしたといえる。

しかし、人間が徳を完全に実現するように生きるとは、なかなかむずかしい。人間は本来、名譽、地位、金銭、世間の評判など様々な誘惑に取り巻かれ、過ちを犯しやすい。常に「良知の鏡は曇りがちである」。だからこれを曇らさぬように不断の努力が求められる。この不断の努力が、真の意味での学問である。知力、感性、技能、体力などは、繰り返しによって磨かれる。常に自らを反省し、特性を磨く努力が必要である。

### 主な中江藤樹語録

#### 一、致良知

人は、だれでも「良知」という美しい心を持って生まれている。この美しい心は、誰とでも仲良く親しみ合い、尊敬し合い認め合うところである。ところが人々は、次第にみにくいいろいろな欲望が起きて、つい良知をくもらせてしまう。私たちは、みにくい欲望に打ち克って、良知を鏡のようにみがき、その良知に従い行いを正しくするよう日々努力することが大切である。(副読本「藤樹先生」)

#### 二、愛敬

「孝徳の感通を手近く言えば、愛敬の二字にきわまれり。愛はねんごろに親しむ意なり。敬は上をうやまひ

下をかろしめ侮らざる義なり。」「本心の孝徳ありて、父母の恩を報いんこと忘れぬるは、愛の雲におほはれて明徳の日の光くらく、心の闇にまよふ敬なり。」このように愛敬とは、孝の思想とたいへん深く関わるものである。分け隔てなく与えられる偏りのない慈愛にもいた愛情だと解釈できる。(翁問答)

### 三、知行合一

人々は学ぶことによって、人として行わなければならない道を知ることができる。しかし、学んだだけで、それを行わなければ、本当に知ったことにはならない。物事をよく理解し、実行してこそはじめて知ったこととなる。(副読本「藤樹先生」)

(注) 本論は高島市立青柳小学校編『良知に生きる子の教育』と藤樹記念館館長 上田藤市郎先生編「中江藤樹の教えと地域の児童への指導」によるものである。